

「生きて、創造しなければならぬ」  
アルベール・カミュにおける「愛の作品群」への困難な移行

高塚 浩由樹

【要旨】

カミュは『最初の人間』の中心に「愛」を位置づけることを望んでいた。彼にとって、生きることは創造することと不可分であり、9冊のノートから成る『手帖』は、彼の作品が創られてゆくアトリエのようなものだった。カミュは1954年に『手帖』に修正を加え、その後も『手帖』を再読しながら、『最初の人間』という「夢見る作品」のプランを練りつづけた。カミュは、主人公が「再生」に到り着く小説を創造することに、自分自身の再生を賭けていたのである。

【プロフィール】高塚浩由樹（たかつか・ひろゆき）…日本大学国際関係学部准教授。東京大学とピカルデー・ジュールヴェルヌ大学で学ぶ。2009年以来、カミュの『手帖』の生成過程を研究。『手帖』のタイプ原稿に加えられた修正について調査し、特にその第1ノートと第7ノートを精査している。第1ノートにある「クリスマスの殺人」のエピソードは、カミュが1936年のメモの直前に挿入し、しかも『最

初の人間』で主人公ジャック・コルムリーにとっての「特権的瞬間」の一つとして描写しているものだが、それが、1929年のクリスマスイブの夜に、カミュの家族が住んでいたアパルトマンの1階にあったレストランで実際に起こった事件に基づいていることを突きとめた。（「クリスマスの殺人」―『最初の人間』の「特権的瞬間」の一つ、『カミュ研究9』、2010）また、第7ノートの調査から、『追放と王国』所収の「客」の源泉が、ロシアのドゥホポール教徒の逸話にあることを発見した。カミュは、この物語の着想を、1929年に出版され、1952年に彼が読んだ『トルストイとドゥホポール教徒』という本から得たのである。

（トルストイへと向かう  
アルベール・カミュ―『手帖』第7ノートにおける「客」の源泉）、*La Revuedes Lettres modernes : Albert Camus* 24、2019）

